G20

野球人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｇ２０

【Ｎコード】
Ｎ５４６５Ｚ

【作者名】
野球人

【あらすじ】
ごく普通の高校生活を送っていたはずの俺、中野修司（なかのしゅうじ）はある事件をきっかけにどこか分からない異世界に送り込まれた。
元の世界にもどり、あの事件の真相を探るべく冒険を始める。

登場人物紹介（前半）

中野修司・・・本作の主人公。ある事件をきっかけに異世界、『ロカード』に飛ばされてしまう。男

エルニ・レイナ・・・Ｇ１０に所属。陛下とは・・・？女

ナルノ・シュターゼン（陛下）・・・『ロカード』の首都『カドイフ』を治める王族。年齢１３。女

カンデ・ローナ・・・Ｇ２に所属。Ｇ２でも最下位の実力。女

レット・セイカ・・・Ｇ２０に所属。Ｇ２０で第２位。女

インダ・ドル・・・兵士育成所に所属。女性に対してキザである。男

まだまだ出ると思いますが、メインは大体こんなかんじです。

G1

・・・もう朝・・・か？
「ん～・・・」
頭がまだボーとしている。寝起き特有の何も頭にない状態が続く・・・
・
「ってあれ？」
こ、ここは？俺はなぜこんなことに？
「え？え・・・？」
あたりを見回してみると、とても豪華な部屋にいることがわかった。
「あれ？確か俺は・・・」

今、俺は危機的状況に陥っている・・・とでも言うのだろう。
「ちょっ！待てって！」
目の前にはナイフを手に持ち今にも刺してきそうな覆面男がいる。
「か、返せ！」
覆面男はさっきからこればっかりだ。なんだ返せって・・・
「だ、だからなにをだ！とりあえず落ち着け！」
「お前のせいで俺の息子は死んだんだ！」
はい！？全く意味がわからない！と、とりあえず現状を確認だ！
・学校から帰ってきたらなぜか家に覆面男がいた。
・俺を見るなりこうなった。
全然わからない！もちろん俺は覆面男の息子なんて知らないし、身近にいた人が死んだなんて聞いてない。
「う、うわっ！」
ズキッとわき腹に痛みが走る。さ、刺された・・・のか？意識が・・

・。

ってはずだった。なぜこんなとこにいるんだ？
「起きましたか？」
「う、うわ！」
だ、だれ！？
「あ・・・。すいません・・・。」
いきなり声をかけられたと思ったら今度は謝られたぞ？なんだ？
「私の名前はエルニ・レイナ。エルナとお呼びください。」
「あ・・・エルナさん？ってどこの人？」
「どこって・・・？この国ですが？」
ここってどこだよと言おうとしたら・・・
「あなたのお名前は？」
あ、あぁそういやまだだったな。
「俺の名前は中野修司（なかのしゅうじ）。ってかここはどこ？」
「ここは王族付属の寮Ｇ１です」
「・・・Ｇ１？」
聞き慣れない言葉に聞き返す。
「はい。詳しい話は王宮に行ってからあると思うので・・・」
なるほど。王宮とやらに行ったら事情がわかるのか。
「わかった。じゃあさっそく行くよ」
「はい。では一緒に私が同行させていただきます。」

王宮への行き道。
「ところで俺はなんでこんなところに居るんだ？」
ほとんど記憶が無いので半ば独り言のように言うと・・・
「さぁ・・・？ここから東のほうにある森の奥で倒れておりましたよ？」

なんでそんなところに・・・。とか考えている内に王宮っていうところに着いた。

「う、うわ～・・・」
中はとんでもなく豪華だった。俺が寝ていた部屋。確か・・・G1だっけ？もけっこう豪華だったけれどあれとは比べ物にならない。
「こちらですよ」
「お、おぅ」
そして一際大きく、キレイな扉の前に来た。
「さぁ、これから陛下にお会いしますよ」

G１（後書き）

新しい小説を投稿させていただきました。
今回は戦闘物を書こうと思いこのＧ２０を書きました。少しでも興味を持っていただいた方、展開のペースは遅いと思いますが学生なのでそこは見逃してください。

下手だと思いますがご指摘、感想をよろしくお願いします。

入寮

ガチャリ・・・と思い扉が開いた。開けたのではなく開いたのだ。
「・・・」
少し戸惑いつつも奥に進む。まぁ隣にはエルナさんも居る事だし。
「よくきたな」
少し幼さを残し、それでいて凛とした声が聞こえてきた。あれが陛下・・・？ってどう見ても１２，３歳の少女なんだが
「陛下。この方が例の・・・」
「うむ」
例のって・・・あ、俺のことか。
「名前は・・・？」
「あ、えっと・・・中野修司です・・・」
「ナカノ？聞かない名前だな？」
まぁ日本名ですからね。
「じゃあ、さっそくだがエルナ」
「は、はい」
「彼をＧ２０に入寮させてくれ」
何？Ｇ２０って？さっきのはＧ１だったよな・・・？
「えっ！？い、いきなりですか！？」
エルナは驚いているがこっちにはさっぱりだ。
「わかったか・・・？」
「はい・・・」

～帰り道～
「はぁ・・・」
エルナさんは帰り道ずっとため息ばかりついている。

「ど、どうした・・・？」
さすがに心配になったので聞いてみた。
「だってあなた！Ｇ２０ですよ！？」
「え・・・だからＧ２０って何？」
「ほ、本気で言ってるんですか！？」
本気だよ。俺はいつでも本気だよ。
「うん。一応・・・」
「あなた、どこ出身なんです？」
「日本だよ。三重県出身」
「ニホン？ミエ？聞いたことありませんね・・・」
え～・・・。マジかこの人。っていうかさ・・・
「あの、ここはどこなの？陛下さんは何にも教えてくれなかったけど」
「あ、えっとここは『ロカード』、その中の首都『カドイフ』です。」
それこそ聞いたことないぞ・・・？ってことはここは・・・い、異世界ってこと？
「え・・・。それって」
異世界ってこと？と言いかけたとき
「あっ！あそこに見えるのがＧ２０ですよ」
で、でかい・・・。声が出ないほどの衝撃だった。

入寮（後書き）

さっそく2話目を投稿させていただきました。
できるときに投稿していくのでそこのところはよろしくお願いします。

では、ご指摘、ご感想お待ちしております。

レット・セイカ

目の当たりにした『Ｇ２０』。さっき行った王宮ほどの大きさがある。
「さぁ、入りましょうか」
エルナの声には少しばかり緊張が混じっていた。

本日２回目の重いドアを開ける。（てか、勝手に開いた。）
「なあ、なんでこのドアって勝手に開くんだ？」
ずっと思っていたことを聞いてみた。ちなみに帰り道、エルナに敬語で無くても良い。と言われたので、それからはタメ口だ。
「なんでって・・・。それは、『ワンス』ですよ・・・？」
「わ、ワンス？」
聞き慣れないその単語を言い返す。
「はい。手を使わずにドアを開けたり、物を動かしたりすることですよ？」
うん？ようするに魔法・・・？いやいや、魔法なんてこの世にあるわけ・・・。でもここは異世界らしいし・・・。なら有りなのか？いやしかし・・・。
「あっ！セイカさん・・・」
イロイロ考えていると目の前に一人の少女がいた。碧眼で金髪だ。みるからに日本人ではない。
「あら。エルナさん。そちらの方は？」
セイカと呼ばれた少女は俺の方を見て言う。
「あ、こちらはナカノ、シュウジさん。」
「あぁ、例の・・・」
なんだよ例のって。
「シュウジさん。こちらはレット・セイカさん。」

「はじめまして。」

レット・セイカ（後書き）

今回は微妙なところで終わってしまい申し訳ありません。
新キャラの説明もできなく自己都合により今話は終わってしまいました。
次の話できちんと説明して行くのでよろしくお願いします。

Ｇ２０（説明）

「はじめまして」
軽くあいさつを交わす。すると
「ではさっそくこのＧ２０を説明しますわ」
会ったばかりだというのにセイカはこのわけのわからなく、どでかい建物について教えてくれるそうだ。

「では、まずここではＧ２からＧ２０までの格付けがされています。」
お、さっそくの説明だ。よく聞いておこう。
「一番下がＧ２、上がＧ２０となります。」
「へ～、あれ？でもなんでＧ１が無いんだ？」
気になったので聞いてみると
「Ｇ１はこの学校の教師なんです」
「えっ？ここ学校なの？」
初めて知ったぞ？そんなこと。
「それはですね・・・――――――

～説明中～

とりあえずこういうことらしい。
ここはカドイフにある学校で『セント高校』。実際は違うのだが俺が勝手に、日本名をつけた。そしてＧ２０はその学校でもトップクラスのやつらがいる。トップクラスというのは勉強でも、スポーツでもなくさっき教えてもらった『ワンス』が強力な人。つまりあの魔法が強いほど学校でも優等生ということらしい。
で、この俺こと中野修司は陛下のご命令でこのＧ２０に編入されたってことらしい。

学校自体はこの寮から約１００Ｍほどの距離でとても近い。しかしこのＧ２０を見て、でかいと思ったがこれはＧ２０だけではなくＧ２からの全員が入っている。つまりＧ２からＧ２０までのおよそ３００人ほどがこの寮にいるらしい。

（でも部屋割りはちゃんとクラスごとに分かれてるんだからややこしい・・・）

Ｇ２などは、たんなる格付けなのでＧ２からＧ２０までいるんだとか。

「まぁ、Ｇ２０とかはたんなる成績だと思っていてください」

「はぁ・・・」

う～ん・・・。ざっと説明してもらったけどわかりにくいな・・・。

まぁその内慣れるだろ。

「そして私はＧ２０の中でも第２位の実力ですわ！」

「へ、へぇ～、すごいな」

やや声を大きくしてしゃべるセイカに少し驚く。

「で、では修司さん。部屋にご案内します」

「お、おう」

エルナも少しびっくりしていたようだ。

「じゃあ、いろいろ教えてくれてありがとな」

「お安い御用ですわ」

セイカに例を言って自室へと案内してもらう。

G２０（説明）（後書き）

今回は説明が多くてすいません。でもやっぱり説明していかないとわからなくなるだろうし。自分も（当たり前ですが・・・）少しづつ、ゆっくりだと思いますが進めていくのでよろしくお願いします。

自室にて

「ここが修司さんのお部屋になります」
「ほぉ・・・」
思わずこんな声が出てしまう。俺はなぜだか知らんけどＧ２０に格付けされたから部屋も豪華なんだろうか？
「と、言ってもベットとかしか無いんだな」
「と、言いますと？」
「あぁ、別に不満では無いんだが、テレビとかパソコンとかは無いのかなって・・・」
こんな異世界に来てまでもそんな心配しかできない俺は自分自身に少々あきれるが・・・
「てれび？ぱそこん？あぁ、東洋の物ですか？」
「まぁ、そうらしいな・・・」
自室にくる途中、エルナに日本の話をしたんだが、うまく伝わらなくけっきょくこんなかんじになった。
「あの、また明日、王宮に行かなければならないので今日はゆっくりしていて下さい」
「へ？また行くのか？」
正直ああいうとこ、苦手なんだよなぁ・・・
「えぇ。まぁ、状況があれですし・・・」
「状況？」
「い、いや。こちらの話ですので。では夕食の時間にはまた呼びに来ますね」
と言ってエルナは出て行った。まぁ夕食までのんびりしてるか。

「・・・さん。修司さん！」
「ん・・・？」
「起きてください！夕食ですよ？」
あぁ、寝てしまったらしい。でもどこな知らないところでも寝れる俺って、適応力すごいね。
「食堂に案内しますので」
「わかった。行くか」

これまた食堂は広いのなんの。って３００人程にいるって行ってたからあたりまえか。
「では、修司さんは裏方へ回ってＧ１の人たちへ挨拶に行ってください」
「え！確かＧ１って先生がいるところだよな・・・？」
「はい、そうですけど・・・？」
ん？このエルナの疑問顔。どっかで見たことあるような・・・？あれか既視感ってやつか。
「こっちの職員室みたいなもんだよな・・・。なんとなくイヤだな」
日本にいた時のことを思い出し、しぶい顔になる。
「そんなこと言わずに！別に悪いことして行く訳ではないですし」
そりゃそうだ。ここにきてまだ半日ばかりしか経ってないのに、呼び出しなんてどんだけ大物なんだよ。
「ここからＧ１までは一本道なのでそこの第一ゲートから行けば着きますよ」
「わかった。ありがとな」
エルナに礼を言ってＧ１へと向かう。ちなみに俺が最初寝てたとこは、Ｇ１でも保健室みたいなところらしい。
「っていうか・・・。やっぱ行くのイヤだよな。職員室・・・」
日本での行いが頭を過ぎる。世話になったよな。よく・・・。

自室にて（後書き）

更新が不定期ですいません。少しずつＧ２０の世界がわかって来たでしょうか？
バトルシーンは都合によりまだ出せずにすいません・・・
あ、頭の中ではちゃんとできているんですよ！？ｗｗ

たぶん説明がわかりにくいと思いますので
わからないところは感想に書いていただくか
メッセージを送ってもらったら説明をしますので。
これからもよろしくお願いします！

クラスメイトは！？

再びＧ１へと来た。とりあえずノックをしてみる。すると
「名は？」
これだけの声が返ってきた。
「あ、中野修司です」
「ナカノ？あぁ、入れ」
こちらは手動で開く。
「君が例の子か」
「はぁ、たぶん・・・」
話しかけられたその女の人は黒いスーツをビシッと着ていた。
「私はメイサ・リンティド。君の担任だ」
担任の先生か。悪い印象を持たれないように・・・
「ちなみに私は見た目では無く、実績で判断するぞ？」
な！読まれた！？
「ふっ、このくらいは常識だ」
うーん。人の心を読むが常識とは、常識はずれだな。
「わけのわからないことを考えるな。とりあえず食堂へ一緒にこい」
えぇ！また行くのか！まぁ深く考えないでおこう。また読まれるし。

「えー。今年から担任になるメイサ・リンティドだ」
今は何か学年が変わった時期らしく一組（俺はこの一組らしい）全員がメイサ先生を見ている。そして・・・
「すでに話題となっているが転校生を紹介する」
ハイ。俺の出番。
「えっと。中野修司です。よろしくお願いします・・・。」
少々戸惑いながら言う。だってさ・・・。
（女子率、高くないか！？）

ほとんどってか一組全員女子！？

クラスメイトは！？（後書き）

今だに物語の中で一日が経っていないことに気づきました・・・。
急遽、先生を出すことになったので。
一組は大変なことになりまして。
もうすぐようやく説明が終わりそうですw
ではご指摘、ご感想お願いします！

４００号室

（な、なんてことだ・・・。）
俺はついつい心の中でつぶやいてしまう。普通の男子高校生なら喜ぶべきなのかもしれないが、何しろ魔法が日常的に使われている世界に来て、そのうえ男子１人。これは思っていたより精神的に苦痛だ。

「おい。あいさつをせんか」
「あ、はい！」
メイサ先生に怒られたので一応自己紹介にうつろう。

「え～、中野修司です。よろしくお願いします。」

一組全員（約３０人ぐらい？）があたりまえだがこちらを見ているから少々緊張をしてしまう。

「よし。中野は理由があり、この世界のことを全く知らん。明日は学校の説明から入る。クラスごとにある始業式は明後日に持ち越す。解散！」
え？終わり？ご飯は？

「中野。お前の部屋は４００号室だ」
ポイッと鍵を投げられる。それをキャッチし、ここに居ても何にもならないので言われた４００号室に移動する。

～自室～
（ってここ、エルナに教えてもらった部屋だな・・・。）
ベットに寝転びながら今日起こったことをおさらいしてみる。
まず俺は日本からここ、ロカードへと飛ばされてしまった。そこでエルナ・陛下・セイカ・メイサ先生に出会った。
いつかは帰ろうと思っているが今は全くわからないのでここに居ようとは思う。
さらにこの学校ではＧ２からＧ２０までの格付けがされており、俺はなぜか１番上のＧ２０に格付けされた。

（はぁ・・・。明日起きたら夢でしたってオチを期待しよう・・・。）

～翌朝～
期待はむなしくやはり部屋は４００号室、ドアにはＧ２０と書かれた札、その横にナカノ・シュウジと書かれていた。

「おはようございます。こんなとこでどうしたんですの？」
珍しい人に声をかけられた。確か・・・
「セイカ・・・？」
「はい？」
「いや・・・。特になんでも無いけどさ・・・」
そこには昨日会ったＧ２０、レット・セイカが居た。
「そんなことより早くしませんと朝のＨＲ（ホームルーム）に間に合いませんよ？」
「え！マジか！？」
俺はこの世界にもＨＲとかあるんだなぁと思いながらセイカについていく。

４００号室（後書き）

ようやく1日経ちましたねｗ
途中でまとめながらじゃないと作者もわからなくなって来てしまうので・・・

まだ予告している戦闘はありませんが次回かその次ぐらいに出しますので。
すいません・・・・
ではご指摘、ご感想お願いします。

カンデ・ローナ

「さて！ここが我が１年１組ですわ！」
いや・・・。そこまで説明されなくても書いてあるし。ちなみになぜかこの世界の言葉、文字は理解できる。その１組に入ると・・・
「おい、中野。早く席に着け。あとレットもＧ２０だからと言って遅刻は許さんぞ」
「わ、わかっていますわ！」
む？あのセイカが押されている？まぁＧ１・・・もとい教師にはやはり太刀打ちできないのだろう。と思いつつ席に着く。
「昨夜のクラス集会でも言ったが私がこれから君たちの担任のメイサ・リンティドだ。さらに転校生は・・・もういいか」
う～ん。スルーだ。まっいいか昨日やったし。しっかし女子だけだなぁ・・・。とキョロキョロしていると
（・・・ん？）
ジッとこちらを見ている人が居る。確かどこかで見た・・・いやあるわけないか。相手もこちらの視線に気付いたのか目を反らしている。
「では今日からさっそく授業だ。全員外へ」
え？ＨＲ終わったの？外で授業ってことは体育か？体育ってどんなことするんだ？

「ではこれよりワンスの実習訓練を行う」
・・・わかってたけどさ。次々と生徒たちがワンスを使っていく。
（・・・しかし）
気がかりだ。ＨＲからずっとこちらを見ている。しかもけっこう遠くから。

「なぁセイカ」
「なんですの？」
近くに居たセイカを呼ぶ。
「あのさ、さっきからこっちを見ている・・・」
「あぁカンデ・ローナさんですね」
「カンデ？」
「えぇ、Ｇ２の中でも１番下ですわ」
フッと軽く笑うセイカ。う～ん・・・
「セイカ」
「はい？」
セイカは疑問顔を見せ、こちらに顔を寄せる。こいつはこいつで美人だからあまり寄られると困るな・・・
「お前が強いことはわかるよ。でも・・・だからと言って下のやつを嘲笑うのは良くないぞ？」
そう俺が注意すると
「うっ・・・。まぁ修司さんがそうおっしゃるなら・・・」
しぶしぶＯＫ。案外普通に説得できたな。そして俺はそのカンデ・ローナに近づく。
「なぁ？」
「わっ！」
いきなり後ろから声をかけたからだろうか？びっくりされた。まぁそりゃそうか。
「な、な、なんだ？」
うわ～、すげぇ動揺。まぁそれは置いといて。
「俺は中野修司。よろしくな」
スっと手を出す。もちろん握手のためだ。
「・・・ん」
はずかしいのかローナは赤面しながら握手に応じてくれた。うん、いいやつだ。
「あれ？」

「こ、今度はなんだ？」
ふと気付いたことがあった。
「お前、刀でも振ってるのか？」
「な、なぜそれを・・・？」
「いや～、俺も昔やってたんだ。剣道」
「ケンドウ？」
「いや、こっちの話だ」
そっか、こっちにも刀が・・・

カンデ・ローナ（後書き）

どうも。今回は新キャラ登場ですね。
次回の予告は魔法、ワンスとは基本どのような物なのか？を説明していこうと思います。
いつも少ない文章の更新ですがよろしくお願いします。

武器

「おい中野。ちなみに言っておくがカンデは刀を振っているわけではないぞ」
いつの間にかメイサ先生がこっちに来ていた。

「え？」
思わず俺は聞き返してしまう。
「それはワンスに使う道具が刀に似ているからだ。
ようするに・・・魔法のつえみたいな？

「どうぐ？」
「あぁ、そうだ。レット！」
「は、はい！」

セイカはいきなり呼ばれてピンッと背を伸ばす。
「お前のワンスを見せてやってくれ」
「わ、わかりました」
するとセイカは左手を前に出し集中しはじめた。その左手に光が集まりじょじょに形を見せていく。それは・・・

「ス、スナイパーライフル？」
こっちの世界のスナイパーライフルのような物だった。
「ス？　ま、まぁレットの武器は『コールド・ウォーカー』。長距離射撃型の武器だ」
なるほど。で、この武器が無いとワンスは使えないとか？
「ほぅ。よくわかったな。では、お前の武器を渡そう。Ｇ１へ来い」
メイサ先生は他の人に自習してろと言い残し去っていく。俺もすぐＧ１へ向かった。ちなみにＧ１の入り口は生徒用と教師用に分かれ

ているので、別々に向かう。

～G1内～

「ほら」

ガチャリと音を立てながら渡されたのは・・・

「こ、これは？」

細く、長い刀。いわゆる太刀だった。

「うん？　お前の私物では無いのか？」

こんなん私物化してたら逮捕もんだよ。

「いや・・・。ちがいますが・・・」

「そうか。お前が倒れていた近くにあったらしいが？」

そうなのか。でも一体誰がこんな物を？偶然とは考えにくいし・・・。

「まぁお前にやろう。お前にも武器はなにかと必要だろう？」

「いや。必要無いかと・・・」

俺は別に魔法を学びに来たわけでも、武器を使いに来たわけでも無い。普通に元の世界に戻る法・・・

「それは無理だ」

「え？」

いきなりのメイサ先生の言葉。

「お前は異世界から来たらしいがどうやって来たのかもわからんのだ。それに・・・」

「それに？」

「今、このロカードは戦争の危機なあるのだ」

「せ、戦争！？」

「あぁ」

いや！あぁ、じゃなくてさ！戦争ってあれだろ？殺し合いってやつ

だろ？
「り、理由は？」
「理由？」
そうだ。戦争には必ず理由があるはずだ。それがわかれば回避できるはず・・・
「今はわからん」
「な、なぜです！？」
理由が無い戦争なんて理不尽すぎる！
「諜報員から昨日、お前が発見されてから2～3時間後だ。急遽連絡が入った」
「・・・その相手は？」
正直、相手などはどうでもよかったが苦し紛れに聞く。しかし・・・
「これは機密事項だ。まだ戦争が始まったわけでも無いしな」

武器（後書き）

今回は少しわかり辛かったでしょうか？
次からはようやくこの世界の事情がようやくわかってきます。
では相変わらず読みにくく醜い文章ですが
よろしくお願いします。

オリジナル

メイサ先生は話を戻すぞと言ってから刀を見て言う。
「その刀は通称『ブレイカーソード』。レットのとは対照的に近距離斬撃型だ。能力は名の通りだと聞いている」
「え？　そんなこと言われても・・・」
わかるはずがない。なんだ？壊す？刀か？先生はふぅと息をつく。
「まぁ、実際に使えばわかるさ」
とだけ言ってＧ１を出ようと立ち上がる。でもこれで俺もワンスが使え・・・
「あぁ、後、お前にワンスは使えないぞ？」
精神力が足らないからな、と言い出てってしまった。むぅ、精神力か。とりあえずここから出よう。

外ではまだ授業中だけあってワンスの実習が行われていた。しかし抜き身の刀を持ってるのは嫌だな・・・。
「ん？中野君？それって・・・」
たまたま近くにいた女子（名前は忘れたが）俺のブレイカーソードを指して言う。
「あぁ、なんか俺の武器だとよ」

「えぇ！すごーい！」
ん？なにがだ？皆持ってるんじゃないのか？色々と種類はあるらしいけど。
「それって自分専用ってことだよね？ね？」
「ま、まぁそうなるな」
自分専用ってのは少し気分が良いな。

「専用武器ってＧ１７からしか持てないんだよ？で、専用武器を持ってる人を『オリジナル』って言うの」
「ま、まじかよ！」
でも考えてみたらレットのコールドウォーカーしか見てない気が・・・？じゃあ
「みんなはなんでワンスが使えるんだ？」
「私たち、Ｇ１７以下の人は身体の精神力を直接使ってるんだよ」
それだから精神の減りは激しいけどね、と付け加える。ん？待てよ・・・？
「でも確かワンスって武器が無いと使えないんじゃ？」
メイサ先生がそんなこと言ってたような？

「あぁ、本当のワンスはね。けど精神を直接使う私たちのは正確に言うと『オールド』。初歩的なワンスって感じ」
なるほど。でもわざわざ区別するのも面倒だからひとまとめにワンスか・・・。
「そんなとこだね。でも中野君ってホントになにもしらないんだね。やっぱり異世界から来たの？」
うっ！もうこんなとこまで広がってるのか。さすが９９％女子クラス・・・。
「次！」
「あ、はーい！　ごめん。呼ばれたから行ってくるね～」
タタタと走っていく女子（ごめん、まだわかんない）。見るとＧ１７の人はあまり居ないのかほとんどの人が武器を使っていない。
「次！　中野！」
「あ、はい！」
メイサ先生に呼ばれたのでそちらに急ぐと・・・。
「お前はワンスが使えないからな。オープンとアウターを行え」
「？？」
俺がわからないという顔をすると

「あぁすまん。オープンは武器の具現化。アウターはその逆を意味する」
「は、はぁ・・・」
全くわからない。
「そうだな・・・。おいカンデ！」
「は、はい！」
呼ばれたのはあのローナだった。

オリジナル（後書き）

さて今年最後の更新はあえて続きそうな雰囲気を残してみました。
これから主人公、修司はどうなっていくのか。で、いつまでたっても
こない戦闘シーンは？
などなど色々と問題が多い作品ですが
これからも、そして来年もよろしくお願いします！

ＬＡＣ（ラック）

「中野にオープンとアウターを教えてやってくれ」
「な、なぜ私が・・・」
なんかローナとメイサ先生がもめてるな・・・。
「なぜって・・・。お前はＧ２だがオリジナルだろ？　間接的ではあるがな」
「でも・・・」
「できないのか？」
「でっ！できますよ！」
「よし、やれ」
ローナはいまさらメイサ先生に乗せられたことを知りう～と赤面した。

「お？話し合いは終わった・・・」
話しかけるが・・・。うわっ！すごい不機嫌そうだ。顔を真っ赤にして怒ってるのか？
「で、ではオープンとアウターについて教えよう」
「おぅ、よろしく」
意外と普通に説明が始まったな。
「基本的に専用武器、まぁ私たちは勝手にＬＡＣ（ラック）と呼んでいるが、ＬＡＣは光の粒子が－－－－
ん？またなんか新たな用語が出てきたな。しかもなんか理科の時間みたいな難しいことを言っているローナ。正直わからん。

「まぁ、ＬＡＣは自分の中にあると思ってもらえばいい」
じゃぁ、最初の説明いらんだろ。
「メイサ先生。実習はどうしますか？」
「う～ん・・・。アウターだけでいい。オープンは明日だ」

「らしいからアウターだけを教える」
そうか・・・。よし、がんばるぞ！

教えてもらってからできたのは実に時間にして2時間。授業内にはもちろん終わらず放課後もずっとアウターの練習だった。なんだ？目の前のＬＡＣを体にしまう感じって・・・。わかるわけねぇだろ。まぁ結局はできたんだがな。
「はぁ・・・」
「おい。アウターぐらいでへばるな」
しかし自分の中に物が入っている感じはいい気持ちでは無いな。なんていうか異物が入ってる感じ。入ったことないがしらんが。
「じゃぁ、ローナもやってみろよ。でも確かお前Ｇ2だったな。なんでオリジナルなんだ？」
今まで気になってたことをさりげなく聞いてみた。しかし
「そ、そんなことはどうでもいいだろう！　では仕方ない。私のＬＡＣを見せてやろう」
豪快にスルー。まぁセイカにでも聞いて見るか。なんて思ってたらローナはもうＬＡＣを出していた。

「コバルト・ナイツ。不本意ながらお前と同じく近距離斬撃型だ」
なぜ不本意なのかは知らんがローナのは短い刀を両手に1つづつ。双剣というものだろうか？
「へ～、いっしょなんだな。これって運命的な？」
俺が気軽にそう言うと・・・
「う、運命！？　い、いきなり何を言い出す！」
ん？　冗談で言ったんだが。急に顔を真っ赤にしだした。怒ってくのか？
「え？　あの・・・」

冗談がバレたのかと思い謝ろうとしたが
「わ、私はもう部屋に戻る！　じゃあな！」
「お、おぅまた明日」
俺がそういうとローナはピクッと一瞬止まり走り去った。なんだよあいつ。いや～しかしアウターだけでもできたから良かった。ローナに感謝だ。

ＬＡＣ（ラック）（後書き）

新たな単語が出てきたり色々と難しいかと思いますが
ご理解お願いします。

ではご質問、ご要望がありましたら
気軽に感想かメッセージでお願いします！

第3実習場

～ローナｖｅｒ～

（うぅ～。何なんだ！　いきなり運命なんて言い出して！）

ローナは先ほどのデリカシーの欠片も無い男。中野修司の言葉を気にしていた。

（ドキドキしたぁ～。しかし・・・少しは近づけたかな？）

そう。ローナの心は修司に傾いていた。しかし１０代乙女の心をあまり理解できていないローナはハッキリと自分が修司に好意を抱いているということに気づいていない。とりあえず現状は『気になるやつ』だ。

（でも・・・。運命か。ふふふっ）

自室、１７０号室に着くがまだ浮かれているローナだった。

元に戻り修司ｖｅｒ

今はのんびりと自室で横になっていた。夕食までまだ少し時間があると言ってたし。セイカが。ちなみにエルナは王宮の使いで遠出しているらしい。エルナは陛下と親密な関係らしくよく学校を留守にするらしい。おつかれだ。しかし日が経つに連れ気になるのが（ってか2日しか経ってねぇけど）家のことだ。父、母共に海外の大手会社に勤めているのでめったに帰ってこないが、いきなり息子との連絡がつかなくなったら大なり小なり心配はするだろう。・・・たぶん。

「はぁ。これからどうするかな・・・」

1人でブツブツ言ってると、コンコン、とノック音がひびいた。

「はい？」
「あの修司さんいます？」
いや、俺しかいねぇだろ。自室なんだから。
「うん？　その声はセイカか？　あいてるぞ」
扉を開け入ってきたのはやはりセイカだった。
「あ、あら？　ルームメイトの方は？」
「るーむめいと？」
って確か寮生活で同じ部屋になる人のことだ。
「えぇ。・・・もしかして修司さんお1人？」
「うんたぶん」
この部屋にルームメイトが見える人は医者か霊媒師に見てもらったほうがいいと思う。
「それはいいですね！　普通は同クラスの人がいるので1部屋2人なのですが」
「いや。でもそれだと俺が女子といっしょになっちまうだろ？　さすがにそれはまずいだろうし」

ちなみに同室の女の子をどうこうしようとは思っていない。
「で、セイカ。俺になんか用か？」
自室に来てくれたんだから用は少しくらいあるのだろう。部屋に薦めるが少しなので、と言い丁寧に断ってくるセイカ。
「明日の授業後、オープンができるようになりましたらごいっしょに第3実習場へ来てください」
第3実習場とは主に戦闘を想定した練習をする場所だ。
「わかった。でもなんでだ？」
理由も無く行く必要はもちろん無いのでセイカにたずねる。すると・・・
「さ、さぁ？　私も先ほどメイサ先生に言われたので・・・」
セイカも知らないらしい。まっ明日のことだからいいか。
「わかった。じゃあ明日は何が何でもオープンをできるようにしな

いとな」
「そうですわね」
会話しているといつの間にか夕食の時間（この世界も１日２４時間だ）になっていた。そしてセイカと２人で食堂へ向かった。

食堂のことを改めて説明するとまず各クラスと一本道に繋がっておりＧ１とも繋がっている。しかし食堂自体がクラスごとに別けられている。１学年１０クラスあるらしいからこの食堂は１０等分され小さな（面積上は広いが）食堂になっている。クラスごとに壁で仕切られているため他のクラスは見えない。そしてここでＣＨＲ（クラスホームルーム）をする。が基本は各クラスでするので放課後などに急な知らせが入るとここでやるようだ。ちなみに全生徒の集会は大食堂と言われる場所でする。

第3実習場（後書き）

こちらもご感想、ご指摘は何度でもよろしいので
少しでも気づいたことがあれば
ご遠慮なくお願いします！

第５４期生

「でもここの料理って豪華だよなぁ」
隣のセイカに言う。
「え？　そうですか？」
う～ん・・・。セイカは良いとこ育ちなのかな？ここの食べ物は見たことも聞いたこともない物だが基本的に肉や野菜、パンみたいなやつだ。

「うん。値段とかはしらないけど見た目的に」
キレイに盛り付けされているし、色合いも良い。俺は親が仕事で居なかったからよく自分で作っていたからなんとなくわかる。

「ところで修司さん。アウターはできるようになりました？」
「ん？　あぁ。ローナがつきっきりで教えてくれたからな」
「つきっきり・・・ですか」
ん？セイカが急に黙り込んでしまった。あ、そういえば
「セイカ。１つ質問なんだが・・・」
「な、なんでしょう？」
「ローナってＧ２だろ？　なんでオリジナルなんだ？」
これがずっと気になっていたんだ。本人に聞いても教えてくれないし。
「あぁ。あれはローナさんのお姉さんのＬＡＣなんです」
「・・・姉？」

「えぇ、私たちはこの学園の第６０期生です。ローナさんのお姉さんは第５４期生。最もこの学園が優秀な生徒を持っていた時のＧ２０。しかも主席ですわ」
ローナのお姉さんはＧ２０だったのか。しかも主席ってことは第１

位ってことだな。
「しかしＬＡＣって兄弟姉妹で受け継げる物なのか？」
もしそうだったら上が優秀なら下は楽できることになるが・・・・。

「いいえ。もちろんそんなことはできません。ＬＡＣは個人の分身とも言える物ですから」
「じゃあなんで？」
「それは『強制転移』です」
「強制転移？」
「はい。理論上は可能ですが、物理的に無理なことです」
うん？可能なのか不可能なのかどっちだよ？
「基本、無理だということです」
あぁ、そうか。

「優れていたお姉さんはある任務で瀕死の大ケガを受けたそうです。そして自分が死ぬことによってＬＡＣが消えてしまうので、それを防ぐため妹のローナさんにＬＡＣを強制転移させたそうです」
そうだったのか・・・。あれ？でも
「それって不可能じゃなかったのか？」
物理的どうとかで。
「えぇ。でもできてしまったのです。なぜかは詳しく知りませんが・・・」
でもそれってローナの意思とか無さそうだよな。無理に人の物を押しつけられて。なんか・・・

「可哀想、とでも言うのか？」
「・・・そう。可哀想、ってえ？」
明らかにセイカと違う声、しゃべり方。これって・・・
「ロ、ローナ！？」
「人のことをコソコソ話してどういうことだ」

少し怒り気味？
「こ、これは修司さんが知りたいと・・・」
まぁ。それは確かにそうだが。
「私はこの力を嫌ったりしていない。むしろ受け入れるくらいさ」
そういうローナの顔はどこか悲しさがあったような気がした。

第５４期生（後書き）

物語の展開が遅く本当に申し訳ありません・・・。

少し予告をしておくと次回、もしくは次々回に戦闘シーンを
いよいよ出していこうと思います。

わかりにくい作品だと思うので
詳しく説明してくれよ！というところは
メッセージや感想に書いてください。

ではよろしくお願いします。

衝撃の真実！？

「はぁ～。風呂はやっぱりいいなぁ」
夕食も終わり自室のバスルームで入浴中、ここには大浴場もあるんだが男子は使っちゃいけないって言われた。聞いてみたらこの学園には俺以外に1人も男子がいないらしい。だいたいワンスを使えるのは女子が多いらしい。しかし男子でも使える人もいれば女子だが使えない人もいる。

割合上8：2。女子が圧倒的に多い。2割のワンスが使える男子は王宮直属の兵士を育成する所が兵士育成所。女子はこの学園でワンスを学んで志願をすれば兵士になれるし、ここの教師にもなれるらしい。

で俺はこのブレイカーソードの持ち主だがワンスが使えない男子ということでこの学園に入学させられたらしい。

（いやいや・・・。これはいろいろとまずいだろう。）
何がまずいかは知らんが直感的に。と言ってもここは俺の1人部屋だし。ちょっと女子率の高い学校と思えばいいよな？・・・な？
「って無理だわ！」
思わず叫んでしまう。俺は特に女子への苦手意識は無いがさすがにきつい。いわゆる女子校的なノリ？みんなが全員女子と思っているから抵抗心とかなんかがないんだ！うん。自分で言っててもよくわからなかったな。
「とりあえず出よう・・・」
長風呂しすぎたのか少し顔がほてっている。その後は寝ることにした。

そして翌日はオープンの練習。しかしオープンは先日のアウターよりすんなりとできた。一瞬オープンができなかったらずっとあの刀は俺の身体の中に入っているのかな？と考えてしまいゾッとしたが無事にできたからよかった。そして後はワンスなどの基礎知識の勉強（正直これは全くわからなかった）をして放課後。場所は第３実習場。

「では３人とも、実戦の準備をしろ」
メイサ先生のお言葉。開口一番これだからなにがなんだか・・・。
ちなみに３人とは俺、セイカ、ローナだ。
「え？　せ、先生？　もしかしてこれから実戦を・・・？」
セイカがたずねる。
「それ以外にはないだろう？」
「は、はぁ・・・」
いや。はぁじゃなくて３人ってことは俺も含まれているんだからな。
「ま、待ってください！」
む？ローナが待ったをかけた。よしよし・・・。このまま時が過ぎるのを待とう。

「修司はまだ今日オープンができるようになったばかりです。なぜ・・・」
「いいから。これはＧ１の命令だ」
「くっ・・・」
うん。瞬殺。わかってたけどさ。

「で、３人っていうことはサバイバル戦ですか？」
俺があきらめて聞くと

「いやチーム戦。２対１だ」
たぶん俺&ローナ対セイカだろう。あいつはＧ２０の２位らしいし。
「中野対カンデ、レットだ」
やっぱり・・・ってあれ？俺１人？
「ちょっ！　ちょっと待ってくださ・・・」
途中でやめたのはメイサ先生ににらまれたからである。

衝撃の真実！？（後書き）

今回も説明が多いですがよろしくお願いします。

そして少しでも気に入ってもらえたなら

お気に入り登録をお願いします！

初戦

「はぁ・・・」
ここは第3実習場の右側準備ルーム。左側にはローナとセイカが行っている。なぜ俺が1人なのかは知らないがメイサ先生いわく、お前1人でカンデやレットくらいなら倒せる。とのこと。いや、無理だろ。普通に。できればやりたくないな。事故かなんかが起こって中止とかないかな？

『両者、グランドへ』
俺の願いは虚しく非情にもアナウンスが流れてきたのだった。

第3実習場に出るともうローナとセイカがいた。このグランドは戦闘を目的として作られたためとても広い。観客席まで設置されている。観客をこんなとこに呼ぶのは危ないんじゃないかと行ったら、観客席と第3実習場の屋根には初代G1の教師たちが特殊なバリアを張ったらしく絶対にそのバリアは貫通できないらしい。だから安全とセイカいわく。今は俺が安全じゃないんだがな・・・。

「では本気で行きますわ」
「手加減無しだ」
いや・・・。ホントにどうにかしてくれませんかね？2人はそれぞれコバルトナイツとコールドウォーカーを出している。ので俺もブレイカーソードをオープンする。
（・・・来い！）
強くブレイカーソードの形をイメージする。そして次の瞬間には俺の右手に太刀が握られていた。

『では、始め！』
メイサ先生の合図と同時にセイカは後ろに、ローナは逆に俺に距離を詰めてきた。
「って、うわ！」
俺の顔のすぐ横をコバルトナイツが通る。ちなみに防具は本人のＬＡＣの特性をはあくした上で自動につけられるらしい。セイカは狙撃しやすいように腕、腰は薄い布のような物で覆われており、急所は硬く守られている。ローナは下半身は軽めで上半身はしっかりと守られている。で、俺。無し。

「俺の防具なくね！？　っておわっ！」
連続でコバルトナイツが通ってくる。間一髪で避けれている。でも無しって言うのは危なくないか？と思った瞬間・・・。

ドオーン！！
「な、なんだ！？」
俺とローナの約数Ｍの間がいきなり大爆発を起こした。一瞬セイカが狙撃したのかと思ったがそんなレベルじゃなかった。
「い、一体なにが起こった！？」
ローナも驚いている。方向は上、と思い見上げた。すると・・・
「な、なんだあれは・・・？」

初戦（後書き）

ようやく戦闘が開始されました。

ご質問、ご指摘、ご感想なんでもよろしいので
お願いします。

少しでも気に入っていただいた方、お気に入り登録なども
よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5465z/

G20

2012年1月14日11時45分発行